台大日本語文研究第 18 期
2009 年 12 月，頁 1-20
2009-10-30 收稿，2009-12-14 通過刊登

『今昔物語集』裡的狐狸故事與中國文學

陳明姿*

摘要

本篇論文主要是探討在以《今昔物語集》爲主的日本古代文學理的狐狸角色與中國古代的文學有何關連及異同。

《日本書記》等《六國史》因受到《山海經》、《藝文類聚》等中國典集的影響，書理所敘述的狐狸都扮演預告吉凶的角色。進入平安時代之後由於更加受到佛教故事等的中國文學的影響，出現在物語文學、說話文學理的狐狸較前一時代出現在《六國史》等的狐狸更具多元性。說話文學的代表作《今昔物語集》裡出現與狐狸有關的故事共計有 31 則，當中對狐狸角色有較詳細敘述者計有 14 則。

筆者在本篇論文裡，特別聚焦於這 14 則故事，探討其與中國古代文學裡的狐狸故事有何關連及異同。

關鍵詞：說話文學、今昔物語集、狐狸、太平廣記、角色

* 台灣大學日本語文學系教授

Fox Tales in Konjyakumonogatarisyuu and Chinese Literature

Chen, Mung-tzu*

Abstract

Taking Konjyakumonogatarisyuu as a paradigm of ancient Japanese literature, this thesis will compare and contrast the characteristics of the role of the fox, as seen in the ancient literature of China and Japan.

Having been influenced by Chinese literature such as *Shan Hai* Jing ("Collection of the Mountains and Seas") and *Yiwen Leiju* ("Collection of Literature Arranged by Categories"), the fox in *Rikkokushi* such as *Nihonnshokki* is often portrayed as having the ability to foretell good and bad fortune. During the Heian period, the fox starts to take on a wider variety of roles in *Monogatari* and *Setsuwa* literature than in *Rikkokushi* in the precious period of time, due to the further influence of ancient Chinese sources such as Buddhist parables. Konjyakumonogatarisyuu, a representative work of *Setsuwa* literature, contains 31 stories in total concerning the fox, 14 of which have a more comprehensive description of it.

This thesis will focus on the 14 stories in order to examine how the role of fox in ancient Chinese literature correlates with their counterpart in ancient Japanese literature.

Keywords: Setsuwa literature, Konjyakumonogatarisyuu, fox, Taiheikouki, role

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

『今昔物語集』における狐説話と中国文学

陳明姿*

要旨

小論は『今昔物語集』を中心にして、日中両国の古代文学における狐のキャラクターの関連と異同を考察したものである。

『日本書紀』をはじめとした『六国史』などの本では、『山海経』、『芸文類聚』などの中国の書籍の影響を受けて、吉凶のしるしとして狐が登場している。そして、平安時代に入ると、仏教説話を含む中国文学・文化がいっそう日本に浸透したため、物語文学、説話文学に登場した狐キャラクターは、前の時代の『六国史』のそれよりも、いっそう多様性を持つようになった。説話文学の代表作『今昔物語集』には、狐と関連する説話は三十一もある。其の中で、特に狐のキャラクターについて比較的に筆を費やした例は十四ある。

筆者は、ここでは特にこの十四の例に焦点をしぼり、中国文学との関連及び異同を考察したのである。

キーワード：説話文学、今昔物語集、狐、太平広記、キャラクター

* 台湾大学日本語文学科教授

『今昔物語集』における狐説話と中国文学

陳明姿

一、

中国の古い文献には、狐に関する伝説が多く収められている。『山海経』の巻一の「南山経」には「又東三百里，曰青丘之山……有獣焉，其狀如狐而九尾，其音如嬰兒，能食人，食者不蠱。」[1]とある。又、『瑞応図記』には、「王者仁智明、則白狐出，又曰：王者仁智動準法度則見……一本云，王者明德動準法度則出，宣帝時得之，狄戎衰也。」[2]、あるいは、「王者，政治太平則黑狐見」、「六合一統則九尾狐見，一云王者不傾於色則至，文王得之，而東夷服。」[3]などの記述が見られる。これらの伝説からわかるように、白狐・黒狐・九尾狐などの珍獣は、仁智のある明君が儒教的な理想政治を行い、天下が治まっている時に現れる。そのため、これらの狐は瑞獣とされてきた。そして、これは天下太平の時だけでなく、君主など、重要人物に吉兆を示す場合も、九尾狐などの珍獣が姿を見せる。『芸文類聚』が引く『呂氏春秋』には禹に関する次のような叙述がある。

> 呂氏春秋曰。禹年三十未娶。行塗山。恐時暮失嗣。辭曰。吾之娶。必有應也。乃有白狐九尾而造於禹。禹曰。白者。吾服也。九尾者。其證也。於是塗山人歌曰。綏綏白狐。九尾龐龐。成于家室。我都攸昌。於是娶塗山女。[4]

ここでは、九尾狐が現れたのは、禹が塗山女と結ばれ、後嗣ができることの瑞応と見なされている。さらに、時代が降ると、丞相など国にとって重要な人物に吉事がある時に白狐が現れる例が見られる。唐の張讀の『宣室志』巻十には次のような話が収録されている。

> 唐丞相李揆。乾元初。為中書舍人。嘗一日退朝歸。見一白狐在

1　楊錫彭注釋『新譯山海經』（三民書局、2004 年 1 月）P.2
2　孫柔之撰・葉德輝輯『瑞應圖記』（藝文印書館、1970 年）
3　註二同掲書
4　歐陽詢『藝文類聚』卷 99 祥瑞部 狐（新興書局、1973 年 7 月）P.2534

庭中搗練石上。命侍童逐之。已亡見矣。時有客于揆門者。因話其事。客曰。此祥符也。某敢賀。至明日。果選禮部侍郎。[5]

唐の丞相李揆が中書舎人だった頃のある日、庭の石の上で白狐が「搗練」をしているのを見る。家を訪れていた客にその吉凶を尋ねると、吉兆だという。そして翌日、李揆は実際に禮部侍郎に抜擢されるのである。しかし、狐が現れるのが全て瑞兆とは限らない。同じく『宣室志』巻十には李林甫に関する次のような記述が見られる。

唐李林甫方居相位。嘗退朝。坐于堂之前軒。見一玄狐。其質甚大。若牛馬。而毛色黯黑有光。自堂中出。馳至庭。顧望左右。林甫命弧矢。將射之。未及。已亡見矣。自是凡數日。每晝坐。輒有一玄狐出焉。其歲林甫籍沒。[6]

ある日、軒下に座っていた唐の丞相李林甫は、「玄狐」が表座敷から庭へ走っていくのを見る。李林甫は射るように命じるが、矢が当たる前に狐は消えてしまう。その後、数日の間、李林甫が軒の下に座るたびに、玄狐が現れ、この年李林甫は「籍沒」（重罪で財産を没収される）される。ここでは、玄狐はあきらかに凶兆として現れているのである。

このように、狐の出現によって吉凶の兆が示される例は中国だけではない。『日本書紀』をはじめとする、日本古代に漢文で書かれた書籍にもそのような記録が見られるのである。

例えば、『日本書紀』には、「石見国言 白狐見（資料五）」（斉明天皇 3 年、657 年）、「是歳。命出雲国造。闕名。修嚴神之宮。狐嚙斷於宇郡役丁所執葛末而去。」（斉明天皇 5 年、659 年）とあり、又『続日本紀』にも「伊賀国獻玄狐」（元明天皇和銅 5 年、712 年）、「況復伊賀國司阿直敬等所獻黑狐。即合上瑞。其文云。王者治致太平。則見。思與衆庶共此歡慶。宣大赦天下。」（和銅 5 年 9 月、712 年）、「是日。東方慶雲見。遠江國獻白狐。」（元明天皇霊亀 6 年 1 月 1 日、715 年）などの記録が見られる。

---

[5] 張讀撰『宣室志』（『筆記小説大觀 22』）（新興書局、1978 年 11 月）P.115
[6] 註五同掲書

六国史には、狐に関する例が凡そ三十例ある（重複している事例を数に入れると三十一例)。即ち、『日本書紀』二例、『続日本記』十一例、『日本後記』五例、『続日本後記』二例、『文徳実録』一例、『三代実録』九例（一例重複）である。内訳は、「白狐」が五例、「玄狐」が一例、「黒狐」が一例、「天狐」が一例、単に「狐」あるいは「狐ｘ」とあるのが十五例（一例重複)、「野狐」が七例となっている。このうち、「天狐」は妖魅とされ、「白狐」「黒狐」「玄狐」はすべて瑞兆として現れている。一方、単に「狐」あるいは「狐頭」「死狐」などと記述されている十六例は全て凶兆、「野狐」の七例も全て凶兆とされる。即ち、古代日本では中国の儒教思想の影響を受けて、珍獣である「白狐」「黒狐」「玄狐」などの狐が現れるのは瑞兆だとされているのである。凶兆については、荼枳尼天の受容による悪狐の登場など本稿では扱い切れない問題も含まれるが、いずれにせよ、日本の六国史に現れる狐は、中国の史書などの影響を受けて、吉凶を予告するしるしとしての役割を負っていると言ってよかろう。

二、

しかし、狐は単に吉凶の兆の役割のみを果たしているのではない。六朝や唐の時代から、西域やインドなどから伝入した仏教世界の狐説話の刺激を受けて、中国の文学者達がさらに想像力を膨らませて、様々なバラエティに富んだ狐のキャラクターを作り上げた。そして、これらの狐説話はさらに、漢籍や仏教関係の書籍とともに日本に伝わり、日本人の狐観にも影響を与えたと考えられる。平安時代の説話文学には狐が登場する説話が多く見受けられるのである。中でも『今昔物語集』には狐の登場する説話が数多く含まれており、三十一話を数える。内訳は天竺部に六話、本朝部に二十五話で、震旦部にはないが、天竺部の六話は、全て『法苑珠林』、『大唐西域記』、『賢愚経巻』など、漢文による仏教説話や経典などの翻案ものなので、それらの説話には中国の狐観も融合されていると考えてよい。この六話のうち、天竺部巻一の 26 話と巻二の 31 話は、狐についてわず

かに言及しているに過ぎないが、他の四話（巻五の 13、19、20、21）は比較的詳しく語られている。又、本朝部の二十五例のうち、狐のキャラクターについて、比較的多く紙幅を割いているのは十話ほど[7]であり、十話とは即ち、巻十四の 5、巻十六の 17、巻二十の 7、巻二十三の 17、巻二十六の 17、巻二十七の 37、38、39、40、41 である。ここでは、天竺部と本朝部の合わせて十四話を取り上げ、狐のキャラクターを中心に考察してみようと思う。

天竺部巻五の 19 話「天竺龜報人語」は『法苑珠林』巻第五十話などの話をもとにして書かれた説話である[8]。冤罪で獄中に入れられた恩人を救出する亀が語られている。亀の策略とは、「狐ヲ以テ宮ノ内ニ鳴キ喤ラセム。然ラバ國王驚キテ占師ニ其ノ吉凶ヲ問ヒ給ハムトス。然ラバ國王ノ无並ク傳キ給ヲ姫宮一人有リキ其ノ人重ク可慎給キ由ヲ占ハセム。」、「蛇亀トシテ姫宮ヲ重ク病スル態ヲ為ム」[9]というものであり、計画通り、「王宮ニハ百千万ノ狐鳴キ喤レバ、天皇驚キ騒ギ給ヒ[10]」て、占師にその吉凶を占わせ、亀の恩人は救われる。なお、この話を語り手は、外国の話として物語っている筈なのだが、途中から「国王」という呼称が「天皇」に変わっている。これはおそらく、日本の読者に外国の国王とは日本の天皇に当たる存在であることを知らしめるために、名称を変更したのであろう。ともあれ、この話のポイントとなる、狐の鳴き声を吉凶の兆と見なす判断は、漢書巻三十一「陳勝項籍傳第一」にすでに見られる。秦末の陳勝は秦の二世に反旗を翻す際、占卜師の進言を聞き入れて、兵士達を信服させるため、「陳勝王」と書いてある朱書の帛を魚腹の中に前もって入れさせておいて、その後、魚を買って煮させ、その「書」が自ら皆の目に触れるようにする。そしてさらに次の叙述がある。

---

[7] 中村禎里は『狐の日本史 古代中世篇』（日本エディタースクール出版、2001 年 6 月）で十一話あると指摘し、巻二十五の 6 も数に入れているが、この話の狐は単に頼光に射られるために登場するような存在であるため、ここでは取り扱わないことにする。

[8] 山田孝雄ら校注『今昔物語集』一（『日本古典文学大系』、昭和 34 年 3 月第一刷、昭和 50 年 8 月第八刷）P.378

[9] 註八同掲書、P.370

[10] 註八同掲書、P.380-381

又間令廣之次所旁叢祠中、夜構火、狐鳴呼曰:「大楚興、陳勝王」卒皆夜驚恐。[11]

即ち、陳勝は「魚書」の他に狐の鳴き声を利用して、自分が将来王になることを、兵卒達に印象付けたのである。ここでの「狐鳴」は勿論吉兆として捉えられている。このような、狐の鳴き声は吉凶の兆を示すという俗信は、説話の中にも現れている。例えば、『太平広記』が引く『捜神記』巻「夏侯藻」という話の中では、夏侯藻が母親の病気のことで淳于智に吉凶を聞きに行こうとした時、狐が門に向かって鳴く。藻は大変驚いて、急いで淳于智のところへ行くと、淳于智は凶兆だと言う。しかも藻に「いま直ちに家に帰って、狐が鳴いたところで大きな声で泣いてください。家の人が全部出終わるまで止めないで下さい」と語る。藻が言われた通りにすると、家人が全部出終わった途端、家は急にがくんと崩れ落ちる。狐は鳴き声によって、まえもって家が崩れて一家が圧死する危険があることを予告してくれたわけである[12]。六朝時代には文学の世界でも吉凶を知らせる狐の鳴き声が取り入れられていることがわかる。

巻五の 13 話「三獣行菩薩道菟焼身語」は『大唐西域記』巻第七をもとにしたものである。但し、原典の方では、狐が水辺に行って、「一鮮鯉」を咥えて来たとあるだけだが、『今昔物語集』の方では、さらに狐が「墓屋ノ辺ニ行テ人ノ祭リ置タル粢、炊交、鮑、鰹、種々ノ魚類等ノ取テ持来テ。」[13]と付け加えられていて、庶民の狐観が写実的に現れている。中島和歌子は、この狐像について『日本霊異記』の中巻の 4 の美濃狐に遡れるとしており[14]、首肯すべき指摘であろう。ただ、この狐像が中国的な狐観と一致していることも忘れてはならない。まず、中国では、古くから狐は墓あたりに棲んでいると考えられていた。また、祖先の墓に粢、魚などを供える習慣がある。

---

[11] 班固撰・顔師古注『漢書』(中華書局、1962 年 6 月第一版、2007 年 10 月第三次印刷) P.1786
[12] 李昉『太平広記』(中文出版社、1972 年 7 月) P.1831
[13] 註八同掲書、P.366
[14] 中島和歌子『平安時代の狐—類書、幼学書、家宝「小狐」けなげさ他—』(『朱』第五十二号、伏見稲荷大社、2009 年 3 月 1 日) P.109

「墓屋ノ辺」にいる以上、人の供えものを取って来るのも当然のなりゆきであろう。この狐像は一般の人の考えている獣としての狐をそのまま表わしていると考えられる。

そして巻五の 20 話は『法苑珠林』からの翻案であり、狐は獅子の威を借りて、百獣の王になるが、獅子の吠え声で逆さまに落ちて死んでしまう。詐欺師が正体を見破られ、命を落とす話である。巻五の 21 話の第一段も 20 話と同じく、狐を詐欺師として語り出した話である。ただし、この話では、虎に追われ、穴に落ちた狐は、世間の無常を観じ、一念の菩提心を起こすことによって、大弁才天になる。詐欺師が神になったわけであるが、中国では、かなり古くから狐を神として祀る風習がある。『太平広記』巻四百四十七に引かれている『朝野僉載』の「狐神」（唐の初年以来庶民はしばしば部屋の中に狐神を祀り、御恩を乞うたという）[15]の話からもその風習を窺い知ることができる。そのため、天竺から伝わったこの話も中国にすんなりと受け入れられ、中国の話と融合したのであろう。

以上の天竺部における狐の説話は、『法苑珠林』などの仏教説話からの翻案であるだけに、いずれも仏教的色彩を濃く帯びている。そして、これらの狐観は後世の日本の狐観にも大きな影響を与えた。狐がしばしば人を騙したりする狡猾な動物の代名詞になる一方で、神としても祀られているということからもその一端を窺うことができよう。

三、

しかし、文学の世界でもっとも興味を喚起するのは、狐の化ける能力だろう。『太平広記』の巻四四七と巻四五四に引かれている『玄中記』の「説狐」と『酉陽雑俎』の「劉元鼎」には次のような叙述がある。

狐五十歳，能變化為婦人。百歳為美女，為神巫，或為丈夫與女

[15] 註十二同掲書、P.1830

人交接。能知千里外事。[16]（『玄中記』）

舊說，野狐名紫狐，夜擊尾火出，將為怪，必戴髑髏拜北斗。髑髏不墜，則化為人矣。[17]……（『酉陽雜俎』）

そして、狐が化ける能力は多くの狐説話とともに日本にも伝わった。ここでは、『今昔物語集』本朝部に収められている狐関係の十の説話を見てみよう。そのうち、変化と関係があるのは、巻十四の 5、巻十六の 17、巻二十七の 37、38、39、41 の四話である。まず、狐が人間と結ぶ異類婚姻譚類型の説話を取り上げる。巻十四の 5「為救野干死写法花人語」はその典型と言っていい展開の話である。

この話は周知の如く、漢文で書かれた仏教霊験譚説話集『法華験記、下』の 127 をもとにした説話である。題名にもある「野干」は、おそらく原典の方で「野干」とあるのを『今昔物語集』でもそのまま使ったのであろう。野干は「射干」とも言われる。司馬相如の「子虚賦」には「射干」という言葉は三回出てきており、そのうちの一回「謄遠射干」の中にある「射干」は獣名として使われている。張揖はこの「射干」について「射干似狐能椽木」としている。即ち、野干（射干）は狐と形は似ているが、別のものなのである。しかし、平安時代に源順が著した『倭名類聚抄』巻十八の毛群類第二百三十三には「狐 考聲切韻云音胡和名木豆称 獣名射干也 関中呼為野干語訛[18]」とある。又、『日本霊異記』上巻 2 の「狐為妻令生子縁」の中でも「野干」を「きつね」と訓んでいる。野干と狐とは混同されて、同一の獣だと考えてられていたのである。

この話の大筋は次の通りである。ある男が朱雀門の前で美女に化けた野干にめぐりあい、契りを交わすが、野干はそのため、男の身代わりに死ぬことになる。男は野干を哀れみ、『法華経』により供養した。その功徳で野干は忉利天に往生したという。

愛する人のためなら、自らの命も惜しまないやさしい女狐である。

[16] 註十二同掲書、P.1858
[17] 註十二同掲書、P.2538
[18] 正宗敦夫編纂・校訂『倭名類聚抄』（風間書房、昭和 52 年 10 月 5 日印刷、昭和 52 年 10 月 15 日発行）

いわば、男性にとっての理想的な恋人像といえよう。こういう女狐のキャラクターは唐代伝奇「任氏」のイメージと酷似している。任氏という女狐も恋人鄭六のために、色々尽くした上、西へ行くと命を落とすと知っていながら、鄭六に従って、一緒に任地へ赴く。そして犬に噛み殺されるという悲劇的な最後を遂げるのである。作者の沈既済は女妖任氏のために伝を書くような形でこの小説を書き、終わりのところでは、さらにコメントとして「嗟乎。異物之情也，有人道焉。遇暴不失節，徇人以至死。雖今婦人有不如者」[19]と語っている。たとえ人間の女であっても及ばないと褒め称えているわけである。女狐任氏の話はおそらく、唐代の文人の間で広く語り伝えられていたであろう。白楽天もそれを韻文化して「任子行」というものを書いている。現存する『白氏文集』には入っていないが、何らかの形で、日本にも伝わったらしく、『続古事談』の一八五に収録されている[20]。白楽天の作品は日本で非常にもてはやされていたので、漢文に秀でた『法華験記』の作者もこの話を知っていた筈である。そして、そこからヒントを得て、この話を書き記したのではなかろうか。しかし、同じく狐を理想的な恋人像として描き上げたとはいっても、中国のものは儒教的思想が強調され、任氏がいかに鄭六のために貞操を守るかということまで語られる。それに対して、日本の方では、そういう語りが見られないかわりに、野干が恋人のために死んだ後、その男の供養した法華経の功徳で忉利天に往生したとある。『今昔物語集』のものは、従来の異類婚姻譚に法華経霊験譚を融合させたため、仏教的色彩が濃く漂っているのである。

とはいえ、異類とのロマンスは六朝、唐代にかなり流行したらしく、それらの話はバラエティに富み、子供まで設けた話もある。しかし、異類との結婚はやはりタブーだったからであろうか、その異類が死ぬか、あるいは二人が分かれる結末となる。『太平広記』巻451に収録されている「李麐」では、女狐の鄭氏が男との間に子を

[19] 註十二同掲書、P.1852
[20] 播磨光寿ら編『続古事談』（おうふう、平成14年9月初版、平成18年9月改定版）P.140

作るが、一緒に上京する途中で死んでしまう。その子供は普通の人間と全く変わりはないが、狐の子ということで養家から冷遇される。そのため、鄭氏の魂が李麝の前に現れ、子供を大事にするよう諭めるという話である。これと同傾向の話として日本には『日本霊異記』の「狐を妻として子を生ましめし縁」がある。美濃国大野郡の男が狐の化けた女と結婚し、「狐直」という子までできるが、犬に正体を見破られ、最後は夫と分かれることになる。哀傷に満ちた甘美な話で、多くの読者の心を魅了したであろう。

しかし、狐と人間との異類婚姻譚は、必ずしもロマンチックな話ばかりとは限らないし、人間と結婚したすべての女狐が全て理想的な恋人として造形されているわけでもない。『今昔物語集』巻十六「備中国賀陽良藤為狐夫得観音助語第十七」はその例である。この話は平安前期の学者三善清行（847～918）の「善家秘記」をもとに、さらに詳しく語られた話で、賀陽良藤の回想談的形式を取っている。その筋は次のようである。

妻が上京したため、一人で暮らしていた賀陽良藤は、高貴な女性に化けた狐に化かされ、彼女について行って、その豪華な邸（実は彼の家の前の倉の床下）で十三年（現実世界では十三日）も明け暮れをともにし、美しい男の子までもうけた。そんなある日、杖をついた俗人（実は十一面菩薩）が現れる。侍者達はその人物を見るや否や一目散に逃げ出してしまい、彼はその人物に杖で背中を突かれて狭いところから外に押し出される。そしてそれによって、ようやく元の世界に戻るという話である。内容はほぼ漢文で書かれた『善家秘記』と同じと言ってよい（ただ、『善家秘記』の方では「居三个年」[21]であるのに対して、『今昔物語集』の方では「十三年」となっている）。一方、狐の化けた美女に化かされ、女と一緒に狭い穴で同棲する典型的な中国の例は、『太平広記』に引かれている『捜神記』の「陳羨」の話であろう。「陳羨」では、部曲霊孝という人物が阿紫

[21] 黒板勝美『扶桑略記』国史大系編修會 吉川弘文館 第二十二（『新訂増補国史大系』第十三巻 昭和 40 年 12 月発行）P.164

と名乗る美人に化けた狐に化かされ、一緒に墓穴の中で同棲するようになる。その後、陳羨によって救い出されるが、意識はまだ朦朧として狐のように行動する。ようやく我に返ったのは、十余日過ぎてからであった。

こういうキャラクターの狐は、先の「任氏」のキャラクターとはまったく異なって、男性を翻弄する存在であり、古来「淫婦」の象徴とみなされる。この話は『捜神記』ばかりでなく、『芸文類聚』にも収められている。そして、『捜神記』も『芸文類聚』も平安時代にはすでに日本に伝わっているため、漢文に堪能な三善清行も知っていた筈である。ただ、賀陽良藤の話の方では、化かされた人物の回想形式でその経緯がさらに詳しく語られており、たとえば、十三日を十三年に、狭い蔵の下を広々とした豪邸に、というように化かされた人間は感じているが、狐が人間の感覚や意識を欺くという点では中国と日本に大きな違いはあるまい。狐に化かされた人間は自分が人間であることまで忘れるのである。霊孝は見附けられた時、「阿紫」の名を呼ぶばかりで、手足も狐のように動かす。良藤も蔵から出る時は、「猿ノ様」に「高這ヲシテ這出テ」来る。このような強い狐の妖術を破るのは、日本の場合、十一面菩薩であった。観音霊験譚が融合されているのである。同じく狐が人を化かす淫婦のキャラクターとして造形された話だが、ここでも日本の方がより仏教的色彩を濃く漂わせているのである。

以上の例とは異なり、狐の変化が見破られる話もある。巻二十七の 37、38、39、41 がそれである。巻二十七の 38 話は、今見たのと同じく狐が美女に化ける話であるから、まず 38 話を見よう。

近衛舎人播磨安高が月明かりの秋の夜、宴の松原で顔を扇で隠した絶世の美女に会い、これこそ噂の妖狐かと思い、追剥ぎを装って刀でおどしかかる。すると、美女は悪臭を放つ小便をひっかけ、狐の姿で逃げてしまうという話である。安高は賀陽良藤と違って美女にめぐり会っても、予備知識があったため、狐の正体を見破ることができた。化かされるかどうかは、その人間の心持ち次第ということであろう。

又、興味深いのは、見破られて逃げる時の逃げ方である。悪臭の強い小便をひっかけて逃げるというのは、中国の狐の説話の中には見当たらない展開であり、日本の文学者たちが狐の獣として側面に留意した結果であろう。

続く 39 話は正体を見破られたため小便をかけて逃げる点は同じだが、化けるのは人妻である。身内に化けて人を誑かす話は、中国にも見られる。たとえば『太平広記』巻四四七の「張簡」では、張簡が家に急に二人の妹が現れたため、後に入って来た妹の方を狐が化けたのだと思い込み、打ち殺すが、その途端、先に来た妹の方が狐になって逃げる。又、『太平広記』巻四四二に収録された「呉興田父」は、狐狸に誑かされ、間違えて自分の父親を殺してしまう話である。中国の話の場合、身内であるが故に重苦しい話になっているが、日本の方は小便が話に軽さを与えている。

この二話はともに狐が正体を見破られて逃げる話であるが、捕まって処罰を受ける話もある。巻 27 の 41 話はその例である。あらすじは次のようにまとめることができる。

女の子に化けて高陽川のほとりに出没し、通行人の馬に乗せてもらっては、途中で逃げ出す狐がいた。滝口の本所のある若い武士がそれを聞いて、自ら捕縛役を買って出る。武士は最初、失敗するが、二度目は見事に捕まえて滝口の本所でさんざんいたぶった末に逃がしてやる。それから十余日後、武士がその狐に会って馬に乗るよう勧めるが、狐はもうこりごりだよと答えて消えうせるという後日譚が付いている。

このように、41 話の狐は厳しい罰を受けているが、しかし、最終的には許されている。これに対して、中国では、人を誑したり、害を加えたりした狐は妖怪と見なされ、捕まったら、殆ど殺されてしまう。処罰してから逃がしてやるのは千年以上も生きた天狐にのみ限る。「天狐能與天通，斥之則已，殺之，不可」[22]と考えられているからである。『太平広記』巻四百四十七の「長孫無忌」と巻四百四十

[22] 註十二同掲書、P.1831-1832

八の「葉法善」にはそういう天狐が登場している。「長孫無忌」では、長孫無忌の「美人」を化かした天狐が捕まった時、桃枝で「五下」（人間世界の五百鞭に当る）打たれた後、逃がしてもらっている。又「葉法善」で僧に化けて人を愚弄した天狐も、正体がばれた時、鞭で打たれて釈放される。天狐ゆえに特別待遇が受けられるのであり、それ以外の狐は大体殺されてしまうのである。それに比べると、高陽川の狐はユーモラスな結末を与えられているということができる。

とはいえ、『今昔物語集』の中にも、その妖力のため命を落とす例がある。巻二十七の 37 話である。簡単に筋を追うと、春日の宮司中臣某の甥が馬を見失って、捜し回っているうちに、あやしい杉の巨木を見る。主従が不審に思って矢を射立て、翌朝、そこで射殺された老狐を発見するという話である。

この話で興味深いのは、狐が人間ではなく木に変化している点であるが、『捜神記』に収録されている化け損じた狐の話でも狐と木との関わりが語られている。巻十八の「張華」がそれである。

張華は晋の恵帝の時代に司空（六卿の一つ）として勤めていた人で、才識に秀でていた。一方、燕の昭王の墓の前には、千年の斑狐と千年の華表木がいた。ある日、斑狐が美しい書生に変じて、張華に会いに行こうとする。華表木は「あなたは確かに才色ともに優れているが、張公は大変智慧に優れている人なので、きっと見破られるに違いない。そうなったら、あなたが命を落とすばかりでなく、私まで巻き添えにされることになる。」と忠告するが、狐はそれを聞き入れない。そして案の定、狐の変化は張華に見破られてしまう。しかし、その書生に変じた狐は千年も修錬を積んでいたため、猟犬などを少しも恐れず、なかなか正体を現さない。そこで張華はその正体を暴くために、燕昭王の墓前の華表木を切りに行かせる。使者が華表木を切ろうとした時、青い服の小児が現れ、使者に目的を聞く。そして「老狐は私の忠告を聞き入れないで、愚かなことをしてしまったため、私まで巻き添えにされてしまった。もう逃げ道はな

い。」と言って、声を立てて泣き出す。使者が木を切ると、血が流れ出る。張華がその木を燃やし、書生を照らすと、書生はたちまち斑狐に戻り、張華はそれを煮させたということである。

ここで特に注目したいのは、張華の才識である。張華は千年の華表木をもって千年の狐の正体を暴き、殺したのだが、狐の正体を現させるために、まず木を切るというのは、森の中に隠れている狐の様子を連想させる。確かに森の木が切られてしまったら、狐は隠れるところがなく、忽ち捕まってしまう。狐がもともと木と深く関わっていることから、こういう話が作り上げられたのだろう。『今昔物語集』の巻二十七の 37 話が張華の話を踏まえているとは限らないが、同じく狐と木との関わりをモチーフにしているという点で興味深い。

関係という点で言えば、個体としての狐だけでなく、その子孫に関心が寄せられた話もある。巻二十三の「尾張国女伏美濃狐語」がそれである。美濃狐は、昔美濃の男と狐の妻との間に出来た四代目の子孫で、力を頼んで、小川の市で人の物品を強奪したりするやくざ者であったが、道場法師の血を引く尾張国の女に鞭で打ちのめされて、改心する。狐の血・法師の血が注目されているのである。これに対して、古代中国の説話を見ると、人間と狐との間にできた子供についての話はあるが、その四代目の子孫まで語る話は見当たらない。子供を登場させたとしても、「李麐」のように、子供への差別を見るに見かねて鬼になって現れるという話になっているのである。

又、狐は化けられるばかりでなく、人に憑依することもできる。『今昔物語集』巻二十の 17 話「染殿后為天宮被嬈乱語」の狐はそういうキャラクターとして登場する。この説話は主に染殿后が鬼になった聖人に取り付かれたことを語る話であるが、その最初に染殿后が狐に取り付かれたことが語られている。その狐を退治した聖人が后を垣間見て、その美貌に引かれて鬼になり、后に取り付くのである。狐を調伏するシーンは以下のように語られている。

> 其験シ新タニシテ、后一人ノ侍女忽ニ狂テ哭キ嘲ル。侍女ニ神詫テ走リ叫ブ。聖人弥ヨ此ヲ加持スルニ、女被縛テ打チ被責ル

間、女ノ懐ノ中ヨリ一ノ老狐出テ、転テ倒レ臥テ、走リ行事能カラズ。[23]

狐は后に取り付いている間は、形が見えない。しかし、聖人の呪力で苦しくなると、后の体から離れて、侍女の体に乗り移り、ついに姿を現して調伏されるのである。狐が人に取り付く話は古代中国にも数多くあるが、狐が責め伏せられる過程をこれほど細かく語ったものは、唐代までの小説には、まだ見当たらない。

ところで、このように狐が侍女の体に憑依し、「狂テ哭キ嘲」るのは、狐神がよりましに乗り移って託宣を下すのと、同様の能力によるものであろう。狐が人に憑依して何事かを人間に伝えるパターンは、例えば、『今昔物語集』巻二十六「利仁将軍若時従京敦賀将行五位語第十七」に見られる。

この話では、藤原利仁将軍が芋粥好きの五位を敦賀の家へ歓待に連れていく途中、狐に出会う。その狐を捕まえて、敦賀へ行って明日の己の時に客を連れていくことを自分の家人に伝えるように命じる。すると、翌日の巳の時頃、利仁将軍の家の男共が本当に迎えに現れる。その中の主だった郎等は次のように報告する。

「夜前戌時宇治許ニ、御前ノ俄ニ胸ヲ切テ病セ給ヒシカバ、『何ナル事ニカ』ト思ヒ候ヒシ程ニ、御自ラ被仰様、『己ハ、別ノ事ニモ不候、此昼三津ノ浜ニテ、殿ノ俄ニ京ヨリ下ラセ給ケルニ会奉タリツレバ、逃候ツレドモ、否不逃得テ被捕奉タリツルニ、被仰ル様、「汝、今日ノ内ニ我家ニ行着テ云ン様ハ、「客人具シ奉テナン俄ニ下ルヲ、明日ノ巳時ニ、馬二疋ニ鞍置テ、男共高島ノ辺リニ参リ台ヘ」トイヘ。若今日ノ内ニ行着テ不云ハ、辛キ目見センズルゾ」ト被仰ツル也。男共速ニ出立テ参レ。遅ク参テハ、我勘当蒙ナン』トテ、怖ヂ騒セ給ツレバ、『事ニモ候ヌ事也』トテ、男共ニ召仰候ツレバ、立所ニ例様ニ成セ給テ、其後鳥ト共ニ参リツル也」[24]

[23] 馬淵和夫校注・訳『今昔物語集』三（小学館 昭和 49 年 7 月 31 日）P.52
[24] 註二十三同掲書、P.610

神通力のある狐は、人の体に憑依して、自分の意思などを伝えることができるのである。中国の「神狐」もそういう類であり、人に害を加える妖狐になるか、人を助ける神狐になるかは、その狐次第ということになろう。ただ、今まで見てきたように、神通力があっても、結局、狐は人間に屈するパターンが多い。それは藤原利仁将軍が狐を使うという行為も同様である。基本的に人間本位の物語の中で、狐の妖しい能力は語り出されている。そして、その能力が人間のために発揮されたのが、狐の報恩譚である。これは日本にも中国にも見られる。『今昔物語集』巻二十七の 40 話「狐託人被取玉乞返報恩語」は、狐が白玉を返してくれた若侍を助け、盗賊の難を免れさせる報恩譚である。又、『太平広記』が引く『捜神』「陳斐」では、酒泉郡の太守が、捕まえた伯裘と呼ばれる千年の狐を殺さずに許してやったため、伯裘は陳斐に悪意を抱く者から彼を守り続ける。六朝や唐に盛行した仏教説話には動物に関する報恩譚が多くあるが、狐に関する報恩譚もその一つであろう。『今昔物語集』と「陳斐」との間には白玉の返還と助命という違いがあるが、狐がその後、必ず恩人の身を守ることを約束する点は同様である。ちなみに、『太平広記』巻四百五十一に引かれている『広異記』の「劉眾愛」には狐と玉とが登場している。狐の体内に「媚珠」（媚玉）があり、それを手に入れた者は、天下の人々から愛されるというのである。あるいは、「狐託人被取玉乞返報恩語」は「陳斐」と「劉眾愛」の両方からヒントを得て作られた話かもしれない。ともあれ、ここで興味を覚えるのは、狐が若侍に言った「必ズ守ト成ラム。此ル者ハ努々虚言不為ズ。亦、物ノ恩不思う知ズト云ウ事無シ」という言葉である。人を化かす動物とされ、詐欺師の代名詞にもなっている狐が、一旦人と約束した以上、決して嘘を付かないと言い、実際、確かに約束を守って、若侍を守る。人間本位の狐説話において狐は人間的秩序の撹乱者であるが、逆にその狐に人格的高さが与えられた時、それは人間批判として有効に機能するのではあるまいか。

以上、『今昔物語集』の狐説話について、中国の文献と比較しつつ、

考察を加えてみた。中国からの影響を受けながら、さまざまに展開した説話文学における狐キャラクターの諸相を確認できたように思う。

四、結び

本稿では『今昔物語集』を中心にして、日中両国の古典文学における狐のキャラクターの関連と異同を考察して来た。問題はまだ多く残されているが、凡そ次のようなことは言えよう。

『日本書記』をはじめとする『六国史』などの書では、中国の史書の影響を受けて、吉凶のしるしとして狐が登場している。そして平安時代に入ると、仏教説話を含む中国文学、文化がいっそう日本に浸透したため、説話文学などの世界では、前代よりさらにバラエティに富んだ狐のキャラクターが登場するようになる。『今昔物語集』には、狐に関わる話が三十一もある。その中で特に狐のキャラクターについて比較的に多く筆を費やした十四の説話に焦点を当ててみると、凡そ次の七種類の属性を抽出することができる。

（一）鳴き声は吉凶の兆の示し
（二）詐欺師
（三）神の一種
（四）化ける
（五）憑依する
（六）約束を守り、報恩する
（七）やくざ者

このうち、（七）以外は、中国文学の狐観にその原型を求めることができる。しかし、影響を受けながらも、次のような中国の狐とは異なるキャラクターが造形されてもいる。

（一）人間あるいは木などに化けられるが、人間には見破られやすい。
（二）正体が見破られると、悪臭を放つ小便をかけて、逃げていく。

（三）神通力をもつ狐の子孫は、普通の人間より力が強く、やくざ者になり、人の物品を強奪するが、最後はさらに力の強い人間に屈服する。

（四）利仁将軍のような能力のある人に使われることもある。

（五）狐は人間より誠実である。

（六）仏教的色彩が濃い。

即ち、道教的な色彩の色濃い中国の狐が変幻自在の捉えがたい存在であるのに対して、『今昔物語集』の狐は、より仏教的色彩を帯びた、人間に身近な、あるいは人間的な存在と言えるのではなかろうか。